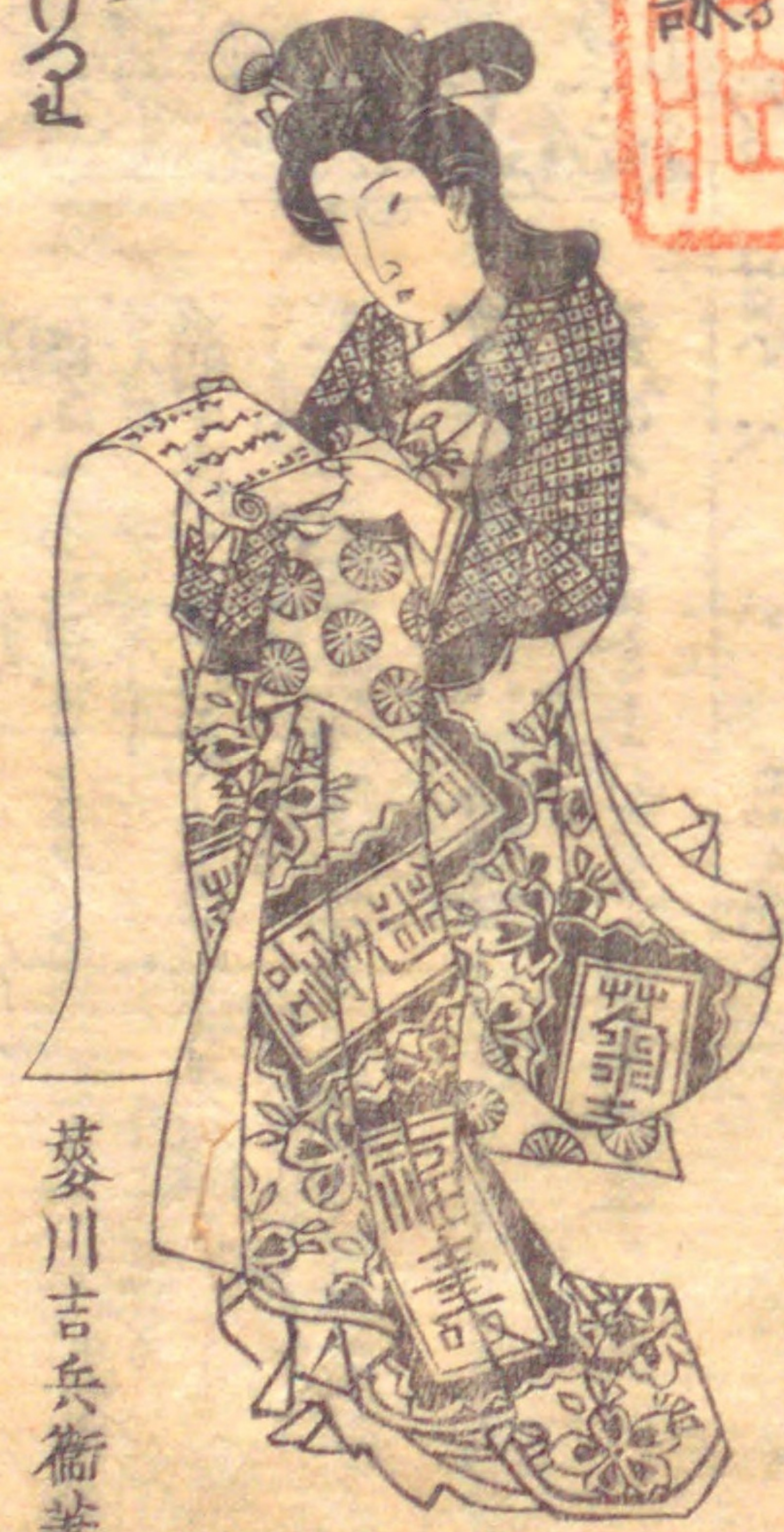






あつろさ  
あるかきつるの  
たふほ  
うれしうり  
けい

或貞女の詠



菱川吉兵衛筆

凌霜  
里談  
菊廼井雙紙  
為永春水作  
歌川國安画  
第四編  
全三冊





9 8 7 6 5 4 3 2 1 120 9 8 7 6 5 4 3 2 1 110 9 8 7 6 5 4 3 2 1

山崎の菊の井



山崎の菊の井  
前生片一善心死... 小七と同穴の好縁なる一悪一善思ひあり  
さればさうな天道とて... 敬んで

黄昏日記の岡清兵衛ハ金平本れ作者  
いとよると権三と女形の元祖なり雅遊の古ハ  
名流活ど八兵衛作と記ても権兵衛撰とから  
かきあも錦心綾文の佳化をまきバ流行ぬまハ

あふたづるまど利ふれまきとる居らる楚  
満人といふ名とらけつた古く老成れのみえ  
ふと賣弘れんと必ひの外其名派続  
文政乃改元ハ彼人没故してたま廿年  
しゆ名黄色表紙の復仇と名前とをのふ  
絶たてとみよる名の作者とげりいよま  
てくやまむむ骨とまうく諸国へつげらる



明馬のおかげむくあまがま 楚滿人の名を知そまひと 且  
 けきとも知らむて故人の名れおかげで作者まごや  
 とあつたことゆゑ族のあつたといつて柄おき  
 夏なつのうまや下くだの作者の名を捨すてよると友人  
 とまの勧めまきより十じふ余年ねん來きたむとみ  
 名前なまとゆめて此こゝ春はるより我われ古ふるに名なあり  
 為な永ながとかり新あらた糸いと志しんけんの去年こぞに

大心おほこゝろしく救たすむべく為なの字あざおのた押おしの  
 いよく、真ま様さま其その迹あとの繁はげ昌しやう三さん都との  
 書林しよりんの需ひめふ志こゝろト小説せうせつげりり見み  
 世よ閑ひま乃すなは報ほう條じょう類るいと志こゝろめくも活あつ業ぎやうを  
 るる筆ふで果は報ほう柳りゆう亭てい先生せんせい曲まが亭てい大人おとな兩りゆう  
 名な大家たいかハ當あた時ときの負おん外がひむくやれつるた  
 も持も人ひとふよるなまごことゆゑはつてもね





爲る。元来作事の惣大将下りでも部教ハ第一  
 げん懐刀の松亭も筆探と云へ一日一冊早て遅  
 吟さん物人である作事者の今年も著作の小  
 説四部大舟は英雄十本杉尾子は豪傑九平士  
 るの義仲の弟三編新田の勇将柱石傳なる  
 を早く彫刻するべくと遠くぬ賣出より  
 此書あるを以て下さるは台と願ふも去張

商人根生 此のむき此の批判

孫がの上

此のむき

丁子車精製乃いそ  
 教訓亭主人



爲永春水誌  
 門人及満人書







爲永春水作 東都三林堂中村幸藏壽梓

靈驗記 松竹梅重盃 初編 二編

標 女今川 全本十卷

凌霜 菊廼井双紙 初編 二編 三編 四編

荒川仁勇傳 繪入大本 全部十卷

神徳 三輪乃里 三編 四編

小松 仁行録 全本 十冊

玉川旧章録 大本 三冊

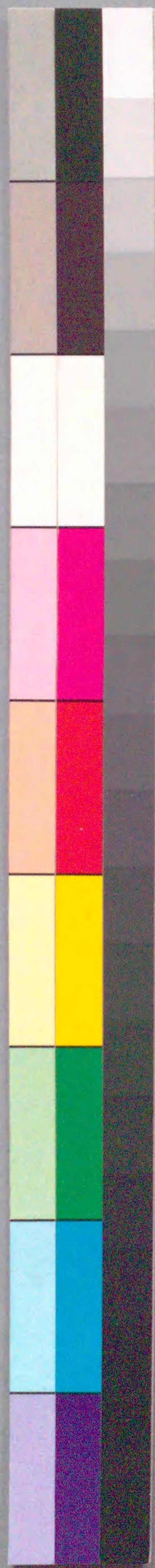
右外為永春水新作の稿紙 3冊 花方より廣知りのるるの 久くは此の稿紙上

凌霜 菊廼井双紙卷之十 教訓亭主人

江戸戯作者 爲永春水著

老々子とらうしんハ招木の幹なればは喻へんこと。昔れ人の華十々々々今ハ此家のまが方のうへ。一個ある女思お君がぬ方を安んず。明くまふ款く社の。露けきふ三年このうこ待ひて今年秋も九月。おんご日敷のはのらうしんハ文を進まう宛ら。

菊廼井





定めなく子の身をよると月ほりの 文「そらうらやまを  
 志こ目より ぬふ残しと書をまきごひの真くあつる多  
 らぶより七居るるを夜の目の寐らまに 果つて居  
 た多うく達共でおれもたまは安寝しと。シテあつてふ  
 環を合く今うまを何野ふぞよして居とト言ふ  
 ちくま父が負つてくと抱せく。涙を拭くは懐紙  
 かのこそを隠しを擧げ。あつては涙を遠くは絆細草  
 物ごとく何野の入あら佐けられ此の入園とまらうと

うど。彼靈魂の羽根を拾ひしその子をぬふ残せ  
 是のこむふらうととを園と文を眉とひそめ  
 文「たそく奇異のこころのうらやま。その喜三郎が  
 甲子より其の帰つて穴をささるが寝るくむれど  
 其子とよのや捨てらるる。そのころが解けくま  
 ことを挿酒屋へもあつてかむかむ。その時それらも  
 妾〜〜のうらやま。あつては食のこころの  
 ぶよらまの此方にも奇しむるごとくあつては

















うして何れもさうやとものごと世の人のいふやうに  
 そんな優しむゆゑに。ふせきぬのお陰に入らぬやう  
 たるその女中今度さういふせきぬの世に  
 かつらうと苦いぞぞとせむげに。それぞ  
 やまは海のとらう。私いふと。足法師をいふ  
 甘うと願ひやせん。菊の井さんと小せきぬを  
 婿ふしてあげて。さういふと。文をいふ  
 こそは。吾も。納め。居る。ま。

美理ごさういふより。さういふ。此のいふ。つらう。さういふ  
 中。あつれ。この父が。計のて。せらう。ぞん。さういふ。版でも。給ふ  
 よい。ト。さういふ。父が。傷。居る。軽。父。い。は。り  
 文。進。六。さういふ。お。君。が。解。り。来。り。と。さ。う。い。ふ。推  
 子の。溜。ま。せ。妻。い。く。知。れ。せ。遣。り。ら。る。ふ。中。ま。傷。ハ  
 こ。よ。な。く。怪。び。つ。この。や。ど。い。は。言。の。ま。ま。傷。が。け。ひ  
 さ。の。と。く。小。士。と。海。よ。せ。あ。い。れ。ん。も。後。親。を。死。切。な  
 お。く。と。い。ふ。い。や。う。と。吾。も。の。明。く。地。の。言。ね。ど。風。も。吹。く。





6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9



夏もあり。くくやませむのまことある。お君も久りまあり  
 志ハ是ぞるのまひなればまきふ小七が勘氣由也。  
 改めくお君と逢へん。さるゆきも彼推子が先  
 さも覚来かなければまづ彼ふへも人をかりぬはま  
 ち一く思へども此方ふすこ一階義るまきまらば  
 律の落るまよむ其方み頼りあられと。いと懇懃ふ  
 いひこければ何とらこみのあるまゝ刻らねどさむる  
 夏もあゝまらるべしと。まきと是をば氣ふもよめだ。

女児ハ父がむねむさむさめ。父ハ女児を痛つて。ト  
 日ニ父とをこつ。さるゆきの梅酒をより取らぬ。いひ  
 越し。さるゆきの別るのひあはれ。彼が仙が思はぬ。遊覽  
 ながさるゆきの父なるべし。さてもお君ハ父の痛み。二三日居て  
 はらう。思ふまゝの菊の井ハ妓婦をさるゆきも。その貞  
 操ハ人み超さるゆき。先頃喜之郎が説法をて。彼は  
 正にハ星敷なきて。名を五川のまゝ。不院す。さるゆき  
 と。清り。ふ。豈計らんや。父上の依けのまの周る。

蘇の井十

八



果る。やまふあ偶とら入。なれど。既ひ  
 西野の存一を。結号。此るを。園る。ふ。  
 仁探さ入。を。一。き。菊の井。り。た。小。七。と。ま。帰。あ。る。て。  
 か。く。や。ま。海。き。二。個。が。中。稚。子。を。ま。入。は。一。し。を。世。あ。  
 あ。く。は。く。そ。の。海。を。一。今。活。ま。く。居。る。う。く。や。其。甲。  
 知。か。い。ら。ん。な。れ。づ。こ。ら。あ。山。七。の。障。を。中。や。た。い。ぬ。い。ぬ。  
 其。甲。入。ら。ぬ。世。あ。居。る。を。一。や。世。あ。の。ま。い。せ。一。ま。  
 ま。い。せ。ま。い。せ。山。七。が。勘。氣。を。洋。さ。づ。づ。の。あ。を。送。入。て

猶。猶。と。ら。い。の。疑。ひ。あ。る。づ。う。づ。だ。二。年。と。い。つ。こ。夜。暮。茶。  
 ひ。く。世。あ。の。症。一。ま。ま。る。う。づ。づ。その。菊。の。井。が。ま。い。せ。一。ま。  
 う。が。あ。の。思。ひ。ふ。つ。ま。さ。れ。て。こ。ん。れ。ば。な。ら。く。こ。の。あ。を。  
 め。と。猶。猶。せ。ん。と。本。ま。い。あ。る。づ。一。且。良。人。の。送。  
 め。る。ま。い。せ。片。端。か。る。あ。の。あ。星。教。な。く。て。脱。ひ。ぬ。ん。と。思。  
 ひ。一。ふ。喜。ぶ。郎。の。速。ゆ。ら。れ。今。や。ま。を。命。る。う。づ。入。て。  
 後。の。亡。者。の。枝。張。の。眼。ハ。翳。う。う。ふ。なる。物。う。其。  
 鶴。更。ら。る。亡。者。の。誓。ひ。一。稚。子。を。ま。い。せ。一。ま。い。せ。一。ま。い。せ。

二葉の掛十

九



眞土のありてはりの女小言とく類のありぬもの  
 たり。鬼ても角ても埋木のたきくすまゆる死者の  
 上辺とてまぐ書遺して記するふあつど然れ  
 たるぬ男でもおさるの子キ一男入バ解まるぬ。  
 飲びのひくさるぐと厚くも電一まはるるを。  
 今やうと親を捨たまて死ぬの旅路は神吟こと。  
 不孝の衆の怖ろしく闇魔の膝の心毒さ思  
 ひいぢれどはれやういふ世の義理せりふせし生

中世の活生て彼の菊の井小義理こそせられ都  
 てさるぐ辛苦せんより良人を常わたりづる  
 かなきものとは愛を那ハ一り皇天を控るるに  
 終は隈つる合るぐ配小配まぬ世の義理小命を  
 ひと及果教るまことと思ひばうと伏し沈む要時  
 酒小く進けるが債とひ致さるるをてけつるもの  
 一必ずぬむとやう我のまふらぎんや。死ぬまはな  
 るるざればるをぬむまらる。神ありと人の説法よ











菊廼井草紙









が家もさへ。お仙を志す。一とぞぬあまき。一が相見候  
 思惟しとたるやどお仙がゆへ所も胸をたれまけ  
 さいひひなぐら。そまふ詮方たうらんや。やうく  
 一度ハ家ふ入り。まをその上母と鬼も角も心を  
 室お討らふ肝心脱ふお仙がゆへまふ母入てまぐ  
 其見の書をまき跡で母あつんてまきしら。たうと  
 慚愧後悔してあまきゆへも忽地ふひるぐ入と  
 ことお入さんふ。いざまぐく送らんとは母まもぐ

勤めての思ひえんぞ女見氣の。こひと心筋は後  
 念入候まきとのまきまらふま。今ハま母も詮方  
 なく今日。一も契の。一ト間まぐ。お仙ふひるひまを  
 とも笑入するの。もま母がま公三人ひまぐ。低やぐ  
 あり。店ふ立よる。一個の雄子や。ご當業の強子を  
 懐き床ルふ。腰をおうけく。男「ライ業とひとら  
 くるる母入。そとてかんだあるま。酒と一合物を  
 志す。版もあるま。やうとらんるト。はまぐ。あまより

菊廼井草紙

十一







孫子と懐く居るなれば。そ入り人ぬあゝ  
 べ。とちの人どいゝと氣ふくまが。猶も吸つけ其  
 二人屈して。相「モシ」んるんまが。あゝいお一人旅  
 推すのあ子とお連るまうた。されううぞれへお通の  
 かなる。男「イヤ」モシ由事さうこ「」が男の何ふとい  
 家におもひいゝぬ。此孫子も海をるのこけを却して  
 連て六歩のゆのこさてく。毎日乳ゆへにまう。イヤ  
 ハヤいけと物だつていゝぬ。相「るるるどあゝ」のあ

志せるとあう。乳ゆへにおまうるまこれや母う。まはして  
 おま入さるのお家へ何ふいゝていゝつやまに入。男「イヤ」  
 がや角の戸をまの申邊にぎぎりりまうとト彼と  
 ぞんやう氣よくうまの障子の被目より取く  
 其の仙の愕然とこそうこハ生た管のまを清が後身  
 在二郎をゆんと年が。りやく被は連入とた内  
 へくまうとつまらんをすべ。知くは貞とて居んぬあ  
 くと裏く狗をわくまづあ。るとその空をを皮をう。





6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9







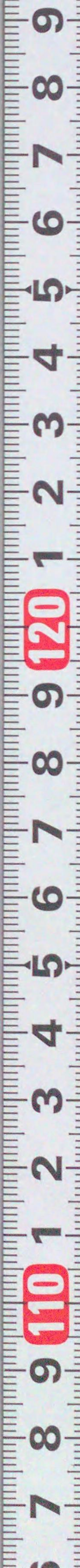
まいづらの子と遊ん 毒一しつゝへ海の仔細のある  
 こと。まづくおぼかきなりや。ト。ゆ七おぼかきなりや。  
 けらびその子を拾ひしことまより甲府へ立廻へて。  
 久くつくとればおぼかきなりや。とまより十方ふ  
 こと。何の中も廿二此種の子ハおぼかきなりや。其魂へうご  
 誓ひをおぼかきなりや。とまより拾へおぼかきなりや。  
 抱ておぼかきなりや。とまより拾へおぼかきなりや。  
 所々方々を索ね推し。ト。まづ中世へ取つてうご

野ひすくく行公のおぼかきなりや。おぼかきなりや。おぼかきなりや。  
 ぞも取しまびは子を抱て。河川へ身を投ぬらうと  
 思ふこと。まづおぼかきなりや。とまより拾へおぼかきなりや。  
 呼は中と陣今ま。とまより拾へおぼかきなりや。  
 りてその時。とまより拾へおぼかきなりや。  
 居りや。おぼかきなりや。とまより拾へおぼかきなりや。  
 おぼかきなりや。おぼかきなりや。とまより拾へおぼかきなりや。  
 まづ拾へおぼかきなりや。とまより拾へおぼかきなりや。

上巻の十一

十一





菊の井

廿の女でござる。ふとこの女  
 此方が知れやせぬ。ぞど勘考し下されと侍  
 まし。その男が卦とてやうとやと申  
 さぬが尋らその女今其男も落つてく親  
 の方み居ま。さぬぐ氣づくも夏なれ。こ  
 よう南三五里ゆが音異なる便のあるぐま  
 るども其年と等しひつりの女小遣さ  
 誘ひなぐく。きさるる尋ぬる人よも

好く疑ひ入る。さこれようひき方南入  
 里の間がれど。酒店あはぐはの途なく。よ  
 酒店と尋ねよと教へら南さ。これ  
 乃まぐくも。酒店ごま立よとらぐく  
 まし。野あのみお。目あうく。その占  
 ためは。遠ひいびら。やせぬ。そよし  
 主人さぬの。お世と。中申入。帰る。大  
 お茶さぬ。お月あ。く。ま。ま。う。ト。

菊の井

十一







おさればど中らもお尻の羨しき子の乃方忘れぬ  
小氣も憐れと一同のうらふしものつてせめて違  
せしうきあまをいふも心の慰れと思へど是れは己が  
身の罪と異なりと異んせし賢き女児が心を  
汲むに程きしと思ひおそるべしうくとお仙がその  
乃方八目と知れねば今ふたや尋ね索るは後由  
うな。妻ひさを半まが國らひみく。小七もいふは  
よし。よし。お君も立ちつとて父が身えのあつていふ。

教の中の教びめを。お仙がよふはさても詮るはさく  
小七が勤氣をゆるし。お君が世の悔びひらぶ  
その家の根とさめく。あつて後はお仙とてゆ  
やうに推子等か。乃方をあつく尋ねる  
とまぶ小七と六家はよびよせ。中き居ハこれやを有  
しこと。ゆらく。澄り園せのく。まご后来を戒め  
勤氣をあつし。さるふより。お尻のるをく。杖より  
らび。とまぶと六明く。ゆらひぐしければ。氣を悪く

二五の十一

二二





208  
12  
682

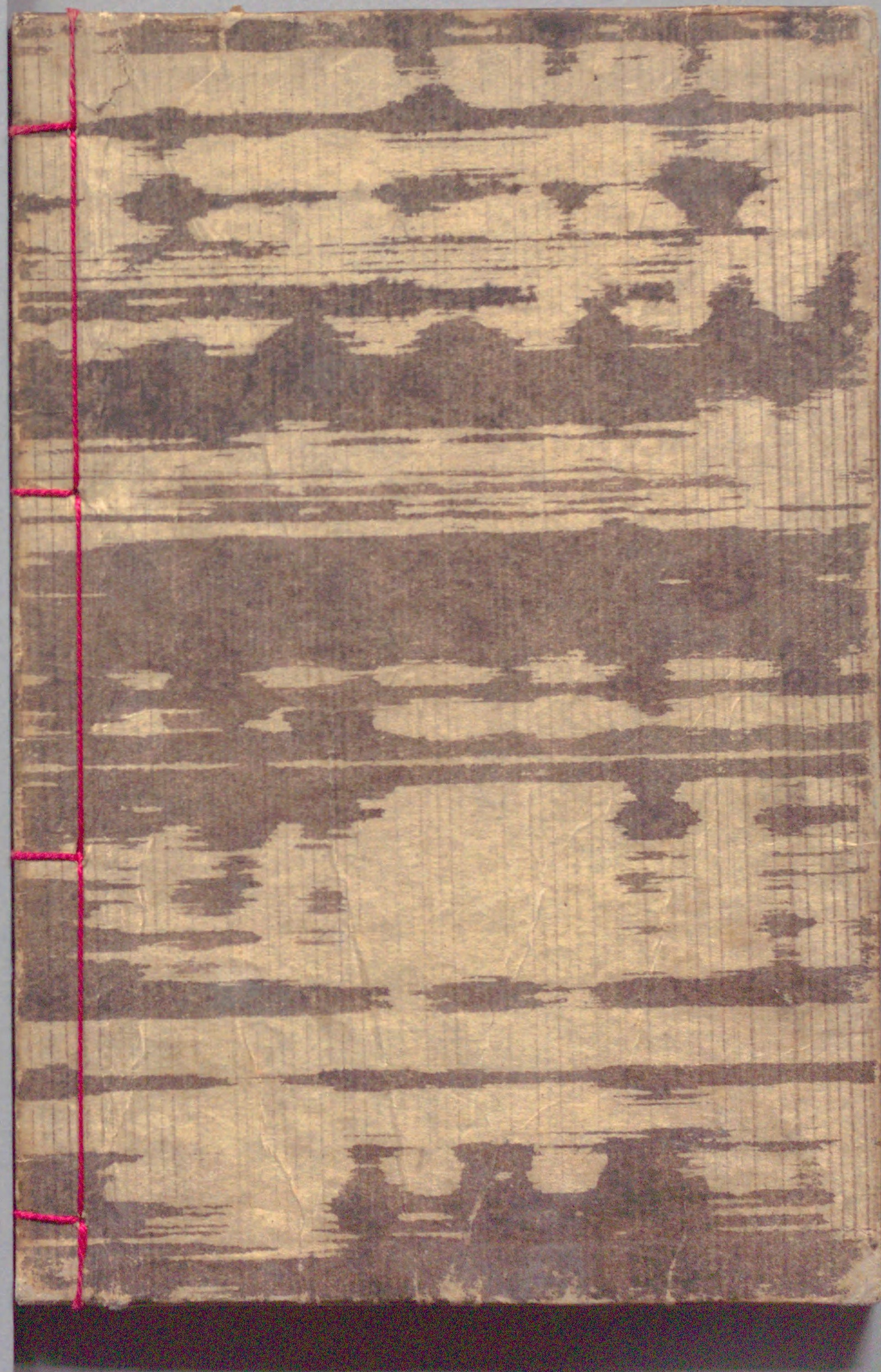
菊きくの井草紙いそうし卷之十終

Handwritten text in Kuzushiji script, likely a list of names or descriptions related to chrysanthemums. The text is arranged in vertical columns and includes various characters and symbols.

菊の井草紙







国立国会図書館 菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用